



特集

身近な 対象から 主題を生む

「主題を生み出すこと」——
学習指導要領の「表現」で重視されているものの一つですが、
そのためには、指導計画に工夫が求められます。
今回の授業では、生徒たちが身近な植物の色や形という
[共通事項]に注目し、そこから主題を生み出していきます。
さて、先生はどのような工夫をして
授業を展開していくのでしょうか。

撮影 鈴木俊介

授業リポート

心を映す ボタニカル絵画を 描こう！

宇都宮大学教育学部附属中学校

高橋庸子^{たかはし ようこ}先生

1年2組 (生徒数40名)

第1時

植物のイメージを
膨らませよう

初夏の日差しがさんさんとさし込む美術室。窓の外に目をやると、中庭にある木々の緑がまぶしい。

「さあ、今日からみんなには『ボタニカル絵画』を描いてもらおうと思います」。高橋先生は笑顔でそう切り出したが、「ボタニカル」という聞き慣れない言葉に、生徒たちはざわめき始める。

「ボタニカルは、植物という意味です。でもね、今回は単に植物をスケッチするわけではありません。どんなことをするかは後で説明します。では、まず教科書や資料集を見て、『なんか心に引っかかるなあ』と思う、植物の作品を探してみてください」。

先生がそう投げかけると、生徒たちは真剣なまなざしでページをめくり始め、植物がモチーフとなっている作品を探しだした。そして、ゴッ

ホやルノワールの作品、植物の素描などを挙げ、「色使いがきれいだと思った」「独特なタッチで描かれていて印象的」「葉っぱの形がおもしろい」などと発表。先生は、「色、描き方、形などが心に引っかかったようですね」と言い、「色」「表現のしかた」「形」と板書。そして、「では、これから植物の写真を見てもらいます」と、モニターにオレンジ色の植物(右上写真)を映し出した。

「この植物からどんな印象を受けますか。自由に発表してください」。生徒たちは「とげとげしている」「南国にありそう」「赤とんぼのようで生きているみたい」などと発表した。「とげとげしている、南国にありそう、生きているみたいという意見が出ました。では、そのようなことから、この植物は『どんな人』だと想像しますか。ちょっとグループで話し合ってみてください」。

生徒たちは「ツンツンしていて、自分がきれいなのを自慢している感じだね」「炎のような色をしているから、情熱的な性格なんじゃない」

い」「自信家で強気な人だと思う」などと、さまざまな意見を出し合い、教室は一気ににぎやかになる。

先生は「では、次に見てもらう植物はこれです」と言い、紫色を帯びた葉がついたつの長い植物を映した(下写真)。生徒たちは見た瞬間、「うわー！なんかあやしい」「暗いなあ」と盛り上がる。

そして、この植物についても、グループで話し合った。「目立たなくてあやしい感じ。でも内に秘めたパワーがあると思う」「つるがうねうねしているから、不安な気持ちをもっている」「最初は絶望的な印象を受けたけど、つるの部分がきれいだから、希望に手を伸ばそうとしてい



ストレチアという熱帯植物の画像を映し、「この植物は『どんな人』だろう」と投げかけた。



ハートカズラという植物の鉢を、書画カメラで映して、葉やつるなど、部分的に拡大して見せた。

るようにも見える」と、生徒たちの想像はどんどん膨らむ。

先生は「ちょっと葉っぱにも注目してみましょう」と言いながら、葉の部分大きく映し出した。「あっ！ハートの形になっている」と生徒たちが気づくと、「そう。実はこの植物の名前は『ハートカズラ』というんです。こうやって近くに寄って見たり、名前を知ったりすると、印象が変わりますね」と続けた。

次に先生は、グループに1台デジタルカメラを渡し、これから全員で中庭に出て、ボタニカル絵画の材料集めをすることを告げた。「植物の色や形、触感、においなどから、この植物はどんな性格だろうと考えて、スケッチブックにメモしましょう。気になった植物は、写真を撮ってきてくださいね」。先生がそう言い終わるやいなや、生徒たちは元気よく中庭へ飛び出していった。

葉っぱを触ったり、花に顔を近づ



けて香りを確かめたりする生徒や、一つの植物をじっくり見つめて動かない生徒。それぞれが自分なりの方法で、植物を観察して写真を撮り、スケッチブックに気づいたことをメモしていく。

そして、中庭から戻ってきた生徒たちに、先生は次のように話した。

「今日は、植物の写真や実物を見て、『どんな人なんだろう』と考えました。次の時間からは、植物に自分の気持ちを重ねて、ボタニカル絵画を描いてもらおうと思っています。



「わあ、この花きれい」。生徒たちは楽しそうに中庭の植物を観察する。触ったり、においを嗅いだりして気づいたことはスケッチブックにメモし、写真を撮る。

今撮ってきた写真でもいいし、家で資料を探してきてもいいし、『自分の気持ちを重ねてみたい』と思う植物を選んできてくださいね」。

指導計画

準備するもの

生徒 植物の資料、筆記具、色鉛筆、水彩絵の具、クレヨン
教師 ワークシート、デジタルカメラ、画用紙、ケント紙、マーメイド紙、黒い画用紙、書画カメラ、プロジェクター

学習目標

- 植物から感じ取ったことや想像したことを基に、主題を生み出すことができる。
- 主題を表現するために、形や色、構図などを工夫して作品を制作することができる。

評価規準

- 植物に自己を投影することに関心をもち、作品の主題を考え、作品制作に取り組んでいる。(美術への関心・意欲・態度)
- 植物から感じ取ったことや想像したことを基に、主題を生み出している。(発想や構想の能力)
- 主題を表現するために、画材の選択や、構図や配色などを工夫して制作している。(創造的な技能)
- 他者の発表を聞いて、作者の意図や表現の工夫を感じ取り、作品のよさを感じている。(鑑賞の能力)

授業展開 (全8時間) 生徒の活動

第1時 導入

植物の形や色などの特徴から、想像を膨らませる。

第2・3時 構想を練る

自分の気持ちを、植物を通してどう表現するか考える。

第4~6時 制作

自分の気持ちを表現するために、形や色、構図などを工夫してボタニカル絵画を描く。

第7・8時 発表・鑑賞

自分の制作した作品を紹介し、また他者の作品を鑑賞して、そのよさを味わう。

特集 身近な対象から主題を生む

第2・3時

構想を練ろう

「みんな、自分の気持ちを重ねる植物は決まりましたか?」。先生はそう投げかけ、ワークシートを配布。ワークシートには、「1. 描こうとしている植物の性格を考えてみよう」「2. この植物にどのような気持ちを重ねようと思いますか」という欄があり、生徒たちは記入していく。先生は、「植物に自分のどんな気持ちを重ねるか。ここがいちばん大事だよ」と強調する。

そして、「気持ちを表現するために、形・色・構図などをどう工夫すればよいか、みんなで考えてみましょう」と切り出した。

同じ花を、丸く描いた場合と三角形のようにとがらせて描いた場合を比較させたり、色や背景によって植物の印象がまったく違ってくことなどをスライドで見せたりしながら、表現の工夫について丁寧に説明していった。

その後、アイデアスケッチに入る。最初は、植物の写真をもっと見つめていた生徒も、徐々に自分のアイデアをスケッチブックに描き出していく。そして、先生は何名かのスケッチをモニターに映して紹介。「人に

右上／植物を通してどのような気持ちを表現するか考え、ワークシートにまとめる。
左上／アイデアスケッチ。どのような作品にするか、イメージをまとめていく。
右／「どう見える?」。生徒どうして作品を見合って、意見交換する場面も。
下／赤は情熱、青は冷静、黄は元気。「色で僕のいろんな気持ちを表そうと思います」。



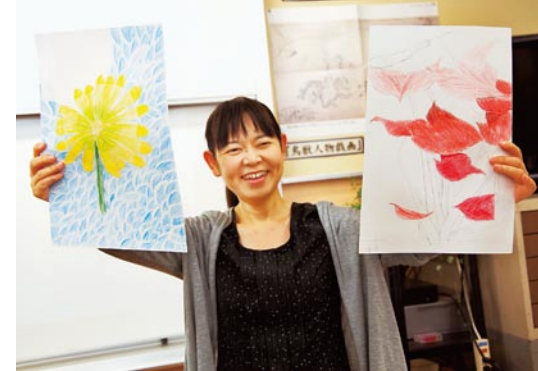
よって、込めた思いや表現のしかたがさまざまでおもしろいですね。何度も言いますが、大事なことは『どんな気持ちを重ねるか』ということ。それによって、画材も変わってくると思います。そして、色鉛筆ではこんな表現ができる、絵の具はこんなトーンが出せる……など、具体例を見せて画材による表現の違いを説明した。

第4~6時

自分の気持ちを表現しよう

生徒たちは、色鉛筆、絵の具、クレヨンなど、思い思いの画材を持参し、早速、制作に取りかかる。

「先生、茎の部分をどう描くか、まだ迷っているんですけど……」「どんな気持ちを表したいの?」「ちょっとへこんでいる気持ち」「じゃあ、茎を少し曲げてみてもいいかもしれない」



先生は、たびたび制作途中の作品を紹介し、よいところを褒める。

先生は、質問する生徒に対して、「どんな気持ちを表現したいのか」を聞き取り、一人一人丁寧にアドバイスをしていく。

配色や背景の描き方など、生徒たちは、試行錯誤しながら制作を進める。「怒っている気持ちを表しているんだけど、伝わる?」「うーん、葉っぱをもっと濃い色にしたらどう?」などと、生徒どうしでアドバイスをし合う姿も見られる。

制作が佳境に入ると、友達の作品を見て感想を言い合うなど、自然と教室がにぎやかになっていく。

次時では、生徒たちが互いの作品を鑑賞し合う。





左／グループでの発表の様子。「なんでこの色なの？」など、質問が飛び交う。
右／友達の作品のよいところを付箋紙にまとめて、発表者へ渡す。

第7・8時

みんなの作品を鑑賞しよう

「今日はお互いの作品を鑑賞し合います。まず、自分の作品を振り返ってみましょう」。先生はそう切り出し、ワークシートを配布。ワークシートには「どのような気持ちを重ねて表現しましたか」「気持ちを表現するために工夫した点を書きましょう」などの項目があり、生徒たちは黙々と鉛筆を走らせる。

「これからグループごとに、お互いの作品を鑑賞します。作品を見せながら、どういう気持ちを込めたのか、どういう工夫をしたかを発表してください。発表を聞いた人は、付箋紙に感想を書きましょう。どんなところがよかったのか、なるべく詳しく書いて発表した人に渡してください」。

先生がそう告げると、生徒たちは4人グループになって、順に発表を始める。どのグループも「この色にはどういう意味があるの?」「背景に色を塗っていないのはなぜ?」など、発表者に次々と質問を投げかける様子が見られる。それぞれが自分なりに工夫して作品を描きあげているからこそ、友達の作品に対して疑

問や興味が湧くのだろう。

そしてグループでの発表が終わった後、グループごとに代表作品を一つ選び、前へ出て発表することに。

「1グループ4人ですから、それぞれ役割分担を決めます。①作品提供者……この人は作品を提供するだけです。②司会者……司会進行をしてください。③作品紹介者……作品提供者に代わって作品を紹介してください。④意見発表者……付箋紙に書かれたグループの意見を発表してください」。

あるグループは、Nさんの作品(下

写真)を選んで発表。Nさんは、「真っすぐな向上心と、周囲の人に気配りができる優しい気持ち」を、植物に重ねた。濃く描いた茎の部分は「芯の強さと向上心」を、茎を取り巻くふわふわとした丸い実は「優しい気持ち」を、緑の葉は「自分の周囲にいる人たち」を表現したそうだ。

発表が終わると、さまざまな質問が出され、終業を告げるチャイムが鳴っても、手を挙げる生徒がいる。

最後に、生徒たちから「細かいところにも工夫されていてすごい!」と、感嘆の声が上がり、大きな拍手が贈られた。Nさんたちは、ちょっとはにかみながら、ゆっくりとお辞儀をし、授業は笑顔で締めくくられた。



上／Nさんたちの発表の様子。
作品を指しながら、制作意図を説明。
下／Nさんの作品。

特集 身近な対象から主題を生む



植物に気持ちを重ねて

植物をさまざまな視点で観察し、想像を膨らませた生徒たち。
さて、どのような気持ちを植物に重ねて、作品を制作したのでしょうか。

Kさん



慎重な性格のKさん。

すごく悲しかったときに
励まされて
元気になった。
そのときの気持ちを、
赤いヘビイチゴに
重ねたい。



中庭で撮影したヘビイチゴの写真を見ながら、
どうすれば「明るい気持ち」が表現できるか、
何度もアイデアスケッチを重ねる。



ヘビイチゴを、柔らかい色で画面いっぱい
ふっくらと描いた。「泣きたかったけど、立ち
直って明るくなった気持ちを表現しました」。

S君



クラスのムードメーカー的存在のS君。

常に諦めず、
前向きでいたい。
茂みの中で輝いていた
白い花に、
その気持ちを
重ねようと思った。



白い花の輝きを強調するため、あえて黒い画
用紙を選んだ。中央に花を配置し、クレヨン
で力強く色を塗っていく。



花の周りにある緑のつるは絵の具を使って描
いた。「緑のつるは敵。黒い背景は闇を表
しています。その中で光る白い花が、僕です」。

Yさん



しっかり者のYさん。

私の中には、
明るい気持ちと
暗い気持ちが
同居している。
その両方の気持ちを、
植物の世界で表現したい。



自分の中にある明と暗の世界を対照的に表
現するため、画面を二つに区切ることにした。
中庭で撮った茂みの写真を参考にする。



右上を「明るい気持ち」とし、光に満ちた世
界を描いた。左下は「暗い気持ち」。鉛筆
だけで暗く仕上げ、対照的に描いた。



T君

ウツボカズラの写真を見て、自分の中の暗い気持ちや迷いの気持ちを表現したいと思いました。紫色を使ったり、背景に渦巻模様を描いたりしたのはそのためです。黄色の部分は、迷う中での「希望」を表現しています。



O君

何があってもすぐ立ち直る、明るく元気な気持ちを、ヒマワリに重ねて表現しました。背景をどうするか迷ったけど、明るい気持ちが外にはじけているように描きました。元気を出すために、色は濃く塗るようにしました。



K君

中庭できれいなツツジを見て、「優しい気持ち」を重ねたいと思いました。僕が周囲の人を助け、それによって人が集まってくる様子を、花とチョウで表しました。ツツジを黄色にしたのは、「人が引きつけられる色」だと思ったからです。



Hさん

「気持ちが沈んでしまっても、決して希望を忘れない心」を表現しようと思いました。一人で暗い所を歩いていたら、その先には光に照らされた花があった——そんなストーリーを考え、作品にしました。



Yさん

白いユリの花に、自分の悲しい、寂しい気持ちを重ねたいと思いました。悲しみを表すために、黒い画用紙を使い、ユリを涙で濡らしました。最後に、画用紙を正方形に切り、ユリが引き立つようにトリミングしました。

授業を終えて

——植物から感じ取ったことを基に、主題を生み出す

今回の授業では、生徒一人一人が、「自分は何を表現したいのか」ということを、しっかり考えられるように、授業を組み立てました。

生徒たちの身近にある植物を題材に選び、植物から感じ取ったことや想像したことを基に主題を生み出せるよう、植物がテーマの作品を見たり、植物を実際に観察したりするなどして、導入を丁寧に行いました。

また、色や形、構図などを工夫して自分の気持ちを表現できるよう、同じ植物をいろいろなパターンで描いたものを見せ、比較させるなどしました。

授業の中では、技術的に多少未熟でもそれには目をつぶり、「どんな気持ちを表現したいのか」がいちばん大事であること、そして、そこから表現のしかたをどう工夫していくか考えるように、生徒たちに何度も投げかけるようにしました。

できあがった作品を見てみると、幼い印象のものもあります。しかし、発表を聞くと、彼らなりに、思いを込め、さまざまな工夫をしていることがわかりました。それぞれの作品がとても愛おしく思えます。(談)



高橋庸子
たかはし・ようこ

栃木県生まれ。
宇都宮大学教育学部附属中学校教諭。
北海道教育大学函館校卒業後、
栃木県内の公立中学校教諭を経て現職。

光村図書中学校『美術』の著作者である上野行一先生に、
今回の授業を参観していただきました。

授業を参観して



上野行一
うえの・こういち

大阪府生まれ。帝京科学大学教授。
大阪教育大学大学院修了。
広告デザイナー、公立学校教諭、
高知大学教育学部教授を経て2010年より現職。
著書に『私の中の自由な美術』(光村図書)など。
NHK 高校講座「芸術(美術Ⅰ)」の
番組の監修を務める。
光村図書中学校・高等学校
『美術』教科書の著作者。

この花は私です

植物をモチーフにして絵を描く授業は、先生方にもご経験があるのではないのでしょうか。今回の特集で紹介した高橋先生の授業は、おそらく皆さんの授業観や題材観を逸脱したものだと思います。なにしろ植物を見せたかと思うと、「この植物はどんな人だと思いますか」と生徒に問いかけたのですから(※)。

しかも、次の時間には「植物に自分の気持ちを重ねて描きましょう」と課題を提示されました。よく見かける授業のように「花の色や形、柔らかななどの感じをよく観察しましょう」などと指示していません。「絵として収まりのよい構図を考えましょう」などと絵作りの工夫の指示もしていません。

先生の指導は、植物をモノとして、描く対象として捉えるのではなく、植物を植物として見ない見方を生徒に示すことでした。

先生が示されたのは、植物を客体化して他者として見る見方と、植物と自分を重ね自己同一化して見る見方です。

こう書くといかにも難しそうですが、私たちは日常、こうしたものの見方を自然に行っているのです。真っ赤なバラの花に情熱を感じたりす

るのはなぜでしょうか。散りゆく桜の花びらにももの哀れを感じたりするのはなぜでしょうか。植物を見ながらそこに心を投影している。植物に、あるときは他者を見て、あるときは自分を見ている。これは感性を働かせて見ていることの証でもあります。

色についても同じことがいえます。同じ色でも感性の働きによって、人それぞれに見え方は違ってきます。同じ青を見ても、青空を想起して「爽やか」と感じる人もいれば、青ざめた顔色を想起して「落ち込んでいる」と見る人もいる。色の見方には、自分の心理が反映されるのです。

元の色を変化させれば、イメージの違いはさらに広がります。高橋先生は第2時で、明快にそのことを示されました。IT機器を駆使し、スクリーンに投影された植物の画像の色を変えて見せ、色による見え方の違い、印象の違いが生じることを示されたのです。自分の気持ちを投影するには植物の色をどのように工夫すればよいかを、生徒に意識づけられた場面でした。

このような「学びのしかけ」に触発され、生徒は色や形が人に与える感情や心理に思いをはせながら、植物を描くことを通して自己を表現していったのです。

※MoMAのギャラリートークに同様のものがある。
『風神雷神はなぜ笑っているのか』
(上野行一著・光村図書出版)を参照されたい。

特集 身近な対象から
主題を生む

